

---

# 冷たい左手

石鍋 盥回し

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冷たい左手

### 【Nコード】

N4682C

### 【作者名】

石鍋 盞回し

### 【あらすじ】

ぼくは不安だった。彼女はクールなんだ。ぼくは、不安だったんだ。

たとえばからりと晴れた秋。木の葉舞う旋風に撫ぜられたときのような、不意うちの感情だった。

ボクは活字から視線をあげた。ごつり、と後頭部が壁に当たるまで。

右肩に、柔らかく温かい感触。壁に頭をつけたまま回し、マリオネツトめく視線を振る。

彼女は全く気付いていない。もっぱら小説に集中している。頬にかかる黒い、黒い長髪。それを避けることすらしない。単調な衣擦れ。

左手はぺたりと畳につけ支えに。右手だけで器用にページをめくっていく。

まるで帳が下りているよう。彼女の周りだけ空気が冷やりとしている。

触れている肩の熱が、あんまりにも頼りなく感じてしまう。

彼女と付き合い始めてから、一週間。

まだキスすらしてない。

というか、ボクが向こう二年と四ヶ月、飛んで十五時間分の勇気を振り絞って彼女に告白して、彼女が「ふうん……いいよ」と返事をくれてから、一週間。

それでも有頂天になった一日目。  
少し落ち着いた二日目。

冷静に思い返せば、ふうん……いいよって、本当にいいのかと不安になったのが三日目。

彼女と初めて知り合ったのは、図書委員会に入ったからで。

じゃあなんで引っ込み思案のボクが告白するほど思いつめたかといえ、それも定かじゃない。

何故か、なんていわれても、言葉が見つからない。

確かに彼女はともかわい。初めに釘付けにされたのはそのせいだけど、でも……。

彼女はインドア派だった。今もこうして、肩をならべて黙り込んで小説を読みふけている。

親友に山のように借りた本にぎっしりと書かれていたデートスポットやおしゃれな店に行く予定をぎっしり立てたのに、四日目と六日目に出掛けて、一週間目の今日は何故かこんなに質素に落ち着いた。

そう、ボクは不安だった。

とても黙って小説なんて読んでられないくらいに。

もう少し勇気があれば肩に手を、なんて。……出来るわけ無い。

図書委員として彼女と話をしたりした頃と比べて、何が変わったのかといえ、彼女の微妙な表情の変化がわかるようになったくらい。

彼女は料理が得意で、特に白身魚のムニエルが好物だったことから

い。

彼女が好む小説は、指輪物語やダレン・シャン、ハリー・ポッターやナルニアみたいなジャンルだ。

他にもたくさんある。突然猫が飛び出してくると、密かに身構える。猫アレルギーらしいとか。

もつともつと知っている。でも、うずたかく、彼女のことを知っていても、それでも不安だった。

ボクが知っているのは、彼女の殻で。

そろそろボクは彼女の『ホントの言葉』というのを聞かないと、なんて意気込んでいた。

「ねえ、これからどこに行かない？」

少し大げさな音がするように、本を閉じた。

「今、いいところなの。もう少し」

にべも無い。視線すら上げない、彼女の返事。

「そっか」

こみ上げそうになったため息を飲み込む。それは筋違いな気がした。

肩を落として、首をもたげる。

彼女の白い左手が見えた。北海道の雪祭り、雪の芸者さんの手を思い出す。

飲み込んだため息が、早々に消化されて違うものになったみたいだ。

ボクは自分の右手を見つめた。

向こう二年と四ヶ月、飛んで十五時間分前借して、枯渴したはずの  
勇気を振り絞ってみる。

エンプティーのはずなのに、おかしいことに、少し力が出た。サブ  
タンクがあつたのか。

ボクは、不安だった。

この右肩にある温かさを証明する何かを、見つけたかった。

小さい深呼吸。そしてボクは彼女の左手に、手を重ねた。

彼女の左手は、ひやりと冷たい。

「……」

彼女は静かに視線を上げた。

でもこっちに向かないで、また活字に、ゆっくりと視線を下ろす。

ボクは、それを見つめて苦笑。

ボクが彼女と付き合って一週間、唯一ボク自身を信じられる、確か  
だと思ふもの。

ほんの微かな変化だけれど、彼女の表情は柔らかくなった気がした  
から。

単純なことに、それで心底安心してしまったから。

ボクは彼女がそうするみたいに、左手だけで小説を開く。  
ページを捲ろうとして、がさりと取り落としてしまった。何気に難  
しい。

彼女の手は、ボクの手の下で、少しずつ温かくなってきた。

（後書き）

ティーンの、恋に恋している感じをよくかけたかもしれない。

む、でもまだまだ修行が必要だ。

よんでくださって、本当にありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4682c/>

---

冷たい左手

2010年12月30日00時05分発行